

インド留学記

その11

ベナレス素描(1)

1

「ベナレス」は、じつはイギリス人がいいや
すいようにつけた呼び名で、現在インドでの正
式名称は「ヴァーラーナシー」です。パーリ語
で書かれた原始仏教聖典には、この「ヴァーラ
ーナシ」の語がよくあらわれます。したがつ
て、古名に復帰したということができましょ
う。しかしここでは、「ベナレス」という呼称で一般

によく知られていますので、この語を用いるこ
とにしましよう。

ベナレスへはじつによく足を運びました。留
学中から現在まで十回は行つたかもしれません。
家内とスリナガルに遊んだかえりにも、ベ
ナレスに寄りました。五月の初めでしたから、
猛暑のまっさかりで、「熱い、熱い」と苦言を呈
されたことを覚えていました。おまけに、ホテル
の部屋のクーラーが故障していましたからなお



東方学院講師
駒女短大講師
阿 部 慈 園

さらでした。夕方の涼しくなつたころを見はからつて、ガンジス河の岸辺に案内しました。川面をわたつてくる涼風にほほをなでられ、また黄金色に輝く落日の神秘さに魅せられたかの女は、少しご機嫌きげんを直したようでした。

2

ベナレスにはインドのこころのようなものがあることは確かです。多くのインド人は、ベナレスに来て、ここで最期の息を引きとり、荼毘にふされて、昇天したいという願望をもつています。

外国人のわたしにすら、「まだ行きたいな」と思われるなつかしさをこのベナレスはもつてします。あたかも、都會に出た者が、生まれ故郷を思うような、子がいくつになつても母を慕うような、そんな思いがガンジス河の岸辺に立たせるのかもしれません。

雨季にはあたり一面を水びたしにするガンジス河も、その乾季には水量を減ずるとはいへ、ゆたかになおやかに流れています。小舟が此岸から対岸へ人を運び、また戻ってきます。河の水の色はあくまでも深い青緑です。

留学中、一月におとずれた時でした。寒いのに腰巻ひとつヒンドゥー教徒たちが沐浴行をしていました。鼻を指でおさえて、頭もろとも水中にもぐります。浮きあがつてはまだドブン。それを何回も繰りかえします。女性はサリーのまま。釈尊の時代から、かれらは、沐浴によつて心身の罪垢が清められるとかたく信じているのです。

3

ベナレスの町の様子を、留学中の日記（昭和五〇年一月三日付）から引用して、素描することにしましよう。

「ここベナレスもやはり、イギリス軍の駐留地（キャンントンメン）があつたと聞くが、ブーナほどそのあとかたはなく、古き良きインドのおもかげを伝えている。ブーナに比べて、よりインド的であり、西欧くさくない。

路地は実に狭い。ちまたには野菜売りや果物売りが、地べたにむしろを広げている。あげもの売りが、軒先にあぶらなべを出している。男が、顔にヒゲをのばした、いいオヤジが、ミシンのペダルをふんでいる。日本ならば、娘さんが母親がミシンをあてるのに、偉丈夫が真剣な顔をして、ミシンを動かしている。おもしろいと思った。

町では、昼間でも女性の姿を見かけるのはまれだ。むくつけき男どもがちまたにあふれている。そのほとんどは、日がな一日何もすることなく、道行く人々をじっと見つめている。特に、われわれ外国人が通りかかると、



黒い大きな瞳をまばたきもせず、強い視線を向ける。こつちも負けじと、目をそらさない。買い物は男がする。ブーナでも同様だ。女的人は、家の中にいて家事と育児とにいそしむ。陽だまりで、母親が赤子に乳房をふくませている光景は、ほほえましい。

町では、リキシヤを主に使つた。本当は歩きながら、立ちどまりながら、ゆっくり見たいとは思うものの、せいている旅でもあり、

また持物をひつたくられる恐れもあるので、

リキシヤの上からベナレスの町を見た。

ベナレス・ヒンドゥー大学に留学している京大大学院の茂木秀淳氏（現在信州大学助教授）は、

『ベナレスはバラモンが多く、彼らは全く無為徒食の徒で、いばつてゐるだけで能がない。日なかねころんと、本ばかり読んでいた』

と語つてくれた。

釈尊は、あえてこのバラモンのちまたに身を投じられ、自らの悟られた所を理解せしめようとした。この路を、この通りを釈尊が歩かれたのか。この露地に、この石の上に腰を下ろされたのか。この河を、数人の弟子たちとともに渡られたのか。そう考えただけで胸ふくるる思いがした。黄金色に輝くガンガーの落日を見ながら

そのとき、こんな句を拾つた。

ベナレスのこの路をこの河を 釈尊が

そして、それから釈尊への想いは次第に増幅され、釈尊はいかなる着衣をされていたのか、どんなものを食べておられたのか、またどんな所に住んでおられたのか、そんな想いがしきりに頭をよぎるようになつた。

（つづく）